

白山ろくにおける森づくり支援

学生団体名 国際交流サポーター（北陸大学）

参加学生 許賢科・王毓茜・陳瀋サン・李玉梅・ガンディマーガンニガー・他 14 名

1. 地域活動の概要

本プログラムでは、ヤマダチ会と提携し、白山ろくの里山保全活動の実際的な作業を行った。この里山保全活動を通じて、白山ろくに住む人々と留学生との交流を行い、白山ろくの過疎地の活性化を促進するのが主な目的であった。また、白山ろくでの生活を体験することにより、日本人の思想や習慣、文化などについて再考する機会を得た。

2. 地域活動の具体的な内容

2-1 杉林整備（きのこ栽培のため）

第1回目は、6月27日に実施、北陸大学からは8名の留学生が参加した。「ヤマダチ会」と一緒に今秋から旧河内村にある里山を舞台に森作りを始めるための準備を行った。

第1回目ということもあり、山での作業やキノコなどについてのオリエンテーションを兼ねて、キノコの森の散策、カタクリ群落をさらに広げるためのスギ林床整備をした。天候はあいにくの雨だったが、参加者は道なき山を登りながら、日本の山を体験したり、普段は使ったことのないような道具を使い、スギ林床整備を行ったりした。その後、イノシシ、シカの肉、なめこ汁など山の恵みを食べながら、自分たちの国との違いや日本の自然について語り合った。大学では学ぶことができないような体験を通じて日本を感じることができた。また、日本人参加者との有意義な国際交流活動もできた。



2-2 土づくり（ワラビ栽培のため）

第2回目は、8月8日に「道の駅瀬女」で実施した。北陸大学からは7名の学生、「ヤマダチ会」からは、7名の参加があった。白山ろくの耕作放棄地での山菜栽培をするための草刈、田起こし、そして、なめこの堆肥を入れる作業を行った。草刈り機を安全に使用するための指導を受け、実際に耕作放棄地の草刈りを行った。また、普通自動車の免許を所持している学生は、トラクターに乗って、田を耕す体験活動も行った。その後、一輪車で堆肥を撒き、更にトラクターで耕した。最後に、今後のため、チェーンソーを安全に使用するための講習を行った。作業終了後には、山の恵みのクマ井やイノシシ井を食べながら各国の食についての情報交換ができた。



2-3 木の玉切り（きのこ栽培のため）、きのこ植菌

第3回目は、11月8日に実施した。「ヤマダチ会」と一緒に旧河内村にある里山でコナラの玉切り、シイタケの植菌を行った。チェーンソーは前回講習を行い、練習したので、上手に玉切りができた。また、ドリルでコナラに穴を開けて、シイタケの菌駒を木づちで打ち込んだ。2年後の収穫を想像しながら、イノシシとキノコのみそ汁を食べた。夜は、白山ろくに住む若者たち（猟師、キノコ農家、コメ農家、観測所のガイド、テーマパーク園長など）と交流会を行った。森や白山ろくについて、各国の自然についての情報交換ができた。



2-4 わらび移植

第4回は、11月14日（土）に「道の駅瀬女」でワラビの植栽を行った。8月に土づくりを行った耕作放棄地にワラビを植えた。普段は土に触ることなどないが、服を汚しながら土を掘り、ワラビの根を埋めたりした。ワラビを見るのも初めての学生もいたため、ワラビについてやワラビ料理などについての話もあった。また、終了後はヤマダチ会でイノシシの解体の見学も行った。イノシシを見るのも動物の解体の作業を見るのも初めてで衝撃を受けたが、食に関して考える良い機会だった。



2-5 冬の里山調査

第5回目は3月上旬に行う予定である。雪の多い白山ろくでの動物や植物の観察を行う。また、雪の多い地方の人々の暮らしについての話を聞き、雪国での生活についての調査を行う。

3. 地域活動の成果

様々な里山保全活動の実践的な作業を行うことができた。それまで触れたことのない道具や機械を使い、杉林の整備、ワラビ栽培のための土作り、木の玉切り、きのこ植菌など、山で生活をする人々の生活体験ができた。このような伝統的な里山保全活用につながる活動を通じて、山の大切さについても学ぶことができた。里山保全活動を行っている人たちは高齢者が多く、後継者も少ないため、労働力として活躍できたと思う。

また、白山ろく地域住民との交流を通じて、日本人の思想や習慣、文化などについて再考する機会を得ることができた。それと同時に地域の方々も他国の若者との交流を通じ、新たな発見があったように感じた。

4. 来年度の地域活動計画

本年度は里山での生活についての体験をした。しかし、里山での生活の一部分しか体験することができなかったように感じる。来年度は、今年度身に付けた技術や知識を生かし、年間を通じて里山保全活動に取り組みたいと思う。具体的には、春の山菜獲りと販売の手伝い、夏の土づくり、秋のキノコ植菌のための立木倒し・玉切り・キノコの販売の手伝い、冬の人参作り・狩猟体験などである。

今年度は山や里山についての知識がないまま参加したが、来年度は山についての学習会等を時間をかけて行い、その後参加する予定である。また、里山保全についての話を活動の途中にしか聞くことができなかったのも、里山で生活をする人々と時間をかけて交流したいと思っている。

5. 学生の感想

①山の活動はとてもよかった。なぜなら、山で自然に接触することができたからである。更に、最も大事なのは、地元の住民達に交流することができたことである。山に頼る生活しているという教科書にはない日本の文化の一部分を了解することができた。

②初めて日本の田舎生活を体験して、とても楽しかった。中国では都市育ちなので、芝刈りや田畑耕しのような農業活動を体験したことがなかった。山で生活する人たちの苦労を理解することができた。活

動の後、美味しい熊肉料理も食べることができた。また、来年も参加したいと思っている。

③山で住んでいる方と色々話し合ったことや、きのこの植菌のお手伝いできたことが日本を知る上でいい勉強になったと思う。現地の方に作ってもらったイノシシのスープもとても美味しかった。また、現地の方と一緒に雑談しながら手作りの鍋料理を作ったのも楽しかった。

④里山にはいろいろな工夫がされていることが分かった。また、山で生活をする人々は高齢者が多いが、移住して山と共に生活をしている若い人たちと交流し、様々な価値観を知ることができたように感じる。

6. 地域活動に対する地域からの評価

ヤマダチ会では、手入れされなくなった二次林や耕作放棄地を山菜栽培や自然体験事業の場として活用する事業を今年度から開始し、北陸大の学生諸氏に参加してもらった。

大半の参加者は山に入るのが初めてで山仕事には不慣れだったが、若さに任せて暑さにも雨にも負けず熱心に取り組んでいた。また、重労働にも関わらず楽しそうに作業する姿が印象的で、チェーンソーなどの体験にも積極的に参加し、地域住民にはたくさんの質問をしてくれた。堆肥の運搬など人力の必要な作業も多かったため、実際の労働力としても多いに貢献した。

ヤマダチ会では、来年度以降も本活動を継続していく計画である。学生の参加は、ボランティアとして大きな労働力になること、若者（特に女子）が参加することで明るい雰囲気になること、さらには交流を通じて新たなアイデアが生まれることも期待できる。今後も、学生に参加してもらえような関係を構築していきたい。